

主催公演情報

8/27
Thu | 市民のためのランチタイム
ジョイフルスペシャルコンサート Vol.72

富山で活躍する音楽家たちによるコンサート。心豊かなランチタイムのひととき。
 ◆出演=門田宇(バリトン)、西野有香(トランペット)
 戸島園恵、奥田知絵、中川佳美(ピアノ)
 ◆曲目=オペラ「仮面舞踏会」より
 おまえこそ心を汚すもの(ヴェルディ)ほか
 ◆時間=11:50～12:50
 ◆会場=富山市民プラザ アンサンブルホール
 ◆入場無料・要事前申し込み
 ◆定員=80名(応募多数の場合は抽選)
 ◆申込期間=8月3日(月)～18日(火)
 ◆申込方法=オーバード・ホールHP内「ジョイフルコンサート」
 特設ページよりお申し込みください。



11/2・3
Mon Tue | ミュージカル「生きる」

日本ミュージカル界のレジェンドが放つ、ジャパニーズミュージカルの金字塔!
 ◆出演=市村正親
 鹿賀丈史(ダブルキャスト)ほか
 ◆開演=11/2(月)18:30
 11/3(火・祝)13:00
 ◆会場=オーバード・ホール

※チケット料金、発売日は決定次第HPでお知らせします。



11/7
Sat | 山中千尋トリオ・ツアー 2020 富山公演

日本が世界に誇るジャズ・ピアニストがオーバード・ホールに初登場!

◆出演=山中千尋(ピアノ、キーボード)ほか
 ◆開演=17:00
 ◆会場=オーバード・ホール
 ◆料金=[全席指定・税込]
 S席5,500円 A席4,500円(当日500円高)
 アスネット会員特別価格
 S席4,500円 A席3,500円



会員先行発売日:終了
 一般発売日:8月29日(土)～

※当公演は7/3(金)の振替公演です。既にチケットをお持ちの方で振替公演のご都合が悪い場合、チケットの払戻しを承ります。詳細は後日HPでお知らせします。

11/23
Mon | フジコ・ヘミング&プラハ室内オーケストラ

奇跡のピアニストがチェコ室内楽の精鋭たちと紡ぎだす唯一無二のハーモニー。

◆指揮=マリオ・コシック
 ◆ピアノ=フジコ・ヘミング
 ◆オーケストラ=プラハ室内オーケストラ
 ◆開演=14:00
 ◆会場=オーバード・ホール
 ◆料金=[全席指定・税込]
 SS席12,000円 S席10,000円 A席8,000円
 B席5,000円 U-25 3,000円(20席限定)
 会員先行発売日:終了
 一般発売日:8月7日(金)～



U-25 25歳以下対象の座席引換券。座席はお選びいただけません。公演当日、当日券窓口で身分証ご提示の上、入場券とお引換ください。※年齢による入場制限については、各公演で異なります。

情報は2020年7月10日現在のものです。

新型コロナウイルス感染対策を徹底して上演します。感染状況によっては公演の開催に変更が生じる場合がございます。

ご来場前にはオーバード・ホール公式HPで最新情報をご確認いただきますようお願いします。

ご来場のお客様へのお願い



- 37.5度以上の発熱、咳が出る等、体調に不安のある方は、来場をお控えください。
- 入場時にサーモカメラ、非接触型体温計等による体温チェックをさせていただきます。
- 会場内ではマスクをご着用ください。また手洗い、手指消毒の徹底にご協力ください。
- 客席、ホワイエ等でのご歓談、舞台への声掛け・ご声援はお控えください。
- 出演者などへの差し入れ、楽屋面会等はご遠慮ください。
- クローケサービス、ドリンクカウンター・冷水器、チャイルドシート・ひざ掛けの貸し出しを中止いたします。

チケット購入方法
 アスネットオンラインチケット
www.aubade.or.jp
 24時間予約可能

インターネット
 アスネットオンラインチケット
www.aubade.or.jp
 24時間予約可能

電話予約
 窓口販売
 アスネットカウンター(オーバード・ホール1F)
TEL. 076-445-5511
 10:00～18:00
 定休日:月曜(月曜が祝日の場合、翌平日休み)



Mite Mite アンケートご協力のお願い

より良い情報誌を作るために、ぜひ皆様の率直なご意見をお聞かせください!

*

アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で5名様に、新国立劇場バレエ団「竜宮」出演者のサインをプレゼントします!

*

回答期間:7月29日(水)～8月16日(日)
 回答はこちらから



交通の
ご案内
 鉄道利用:富山駅下車、北口正面から徒歩2分
 航空利用:富山空港よりタクシーで約25分、
 バスで富山駅まで約30分
 お車利用:北陸自動車道 富山I.C.出口から約20分



オーバード・ホール(富山市芸術文化ホール)
 〒930-0858
 富山県富山市牛島町9-28
 TEL.076-445-5620
<http://www.aubade.or.jp>



オーバード・ホール

最新情報はHPをご覧ください

ミテミテ65-2020.summer号
 発行日:2020年7月27日
 発行所:公益財団法人 富山市民文化事業団
 TEL.076-445-5610
 企画・編集:Mite Mite編集室
 Design:CROSS
 Cover Photo:「Meditation」より 撮影 六渡達郎

Mite Mite

「人と、街と、劇場をつなぐ。」 オーバード・ホール情報誌



2020 - summer
VOL.



劇場を愛する皆さんへ

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、オーバード・ホールで公演が行われなくなつて4か月近くが経ちました。まだまだ予断を許さない状況が続きますが、それでも富山の舞台芸術の灯火が消えないように少しずつ動き始めています。今回、オーバード・ホールの芸術監督やご縁のあるアーティストから、近況報告をはじめ、舞台芸術や劇場を愛する皆さんへのメッセージをお寄せいただきました。

Sudo Akira

「AFTER THE WAR」

楽しみにしていた遠足や運動会が雨で中止になった時のショックと同じだなと思っていたら、このコロナ騒ぎは雨や台風どころではなくて、まさに戦争のような状況になった。さて困った。音楽や演劇やアート全般のイベント、全てが自粛することになり、しかもそれが世界中に広がり、今までのやり方を変えないといけないことになりつつある。そのうちに電気がつくから、しばらく停電を我慢しようなんてレベルじゃない。また光が戻っても100ワットあったものが60ワットくらいしかないかもしれない。どうしたらしいものか。

CDやDVDが売れなくなって、いわゆる権利ビジネスが停滞して、興行ビジネスへと転換したのに、同じ空間で生のライブはリスクが高いので遠慮しなくてはいけない。会場の

キャバの半分の集客で開催することになれば、今までのビジネスとしての体系が壊れてしまう。そもそも人が集まるところにわざわざ行くことに躊躇するだろうし。無観客で収録したものを配信しましようという解決策を唱える人たちもいるが、ずっとスマホの画面を見ながら生活することになるのかと思うと力が抜けていく。おそらく元には戻らないんだろうね。だったらどういう形で芸術文化が人を楽しませるのか。ここはみんなで知恵を出し合って考えるべきです。正しい答えはすぐには見つからない。でも優れたものを安心できる環境で鑑賞できる方法を見つけなくてはいけないでしょ。

オーバード・ホール 芸術監督 須藤晃



はじめてオーバード・ホールを訪れたのは2013年2月、同劇場プロデュースの名作ミュージカル上演シリーズ第3弾「ミー＆マイガール」出演の時でした。私のタップの先生で演出家の本間憲一さんが、オーバード・ホール主催のミュージカルワークショップで講師を務めていることや、森雅志市長とは友人として親交があることなどから、芸術の薰りあふれる富山で“いつか富山発信のミュージカルをやりたい”そんなことを思っていました。

今年に入り、想像すらできなかつた世の中



になりました。軒並み舞台は中止になり、私も来年1月に東京で予定していた舞台・Theレビュー「カーテンコールをもう一度！」を中心せざるを得ませんでした。このようなレビュー・ショーの富山上演を数年前から計画し、富山市ご出身の剣幸さまにお声がけすると快く引き受け下さいました。来年3月の上演実現に向か、コロナ危機を乗り越えなければいけない今こそ、東京発信ではなく、バンド・ダンス・スタッフ全て富山の皆さんと素敵なエンターテインメントをつくりあげていきたい！

オーバード・ホール25周年という節目に、みんなの記憶に残る楽しい作品ができるよう、市民の皆様のお力添えをどうぞよろしくお願ひいたします。

歌手・女優 中尾ミエ

Nakao Mi

インターネットで誰かが書いた「引きこもりにも才能がいる」という言葉を読んで思わず膝を打った。そうか、私には引きこもりの才能がなかったのだ。この三ヶ月全ての公演がキャンセルになり、毎日お家飽きた、自炊飽きた、本読むのも飽きた、ユーチューブ飽きたと退屈でしうがなかった。我々狂言師は毎日、日本中あちこちへ赴き舞台をするのが生業の旅芸人である。長旅の時は自宅が恋しくなることもあるが、色々な地方で違った風景を眺

め地元の名産を食することが大きな楽しみである。そして何より毎日、舞台上に立ってお客様に笑って楽しんでいただくことが一番の活力になっている。それがいいのは何よりツライ！

今回わかったのは、パンデミックの際は舞台芸術は一番最初に公演が中止となり、そして一番最後まで活動を再開できないということだ。舞台芸術の存在意義、狂言師として生き行くこと、表現とは何なのか。そんなことを参考するいい機会になったとポジティブに捉えている…、わけもなく、ただひたすら「早く舞台に立ちたい！」と悶々とする日々なのである。

狂言師 茂山千之丞



Shigeyama Sennojo

Inoue Michiyoshi

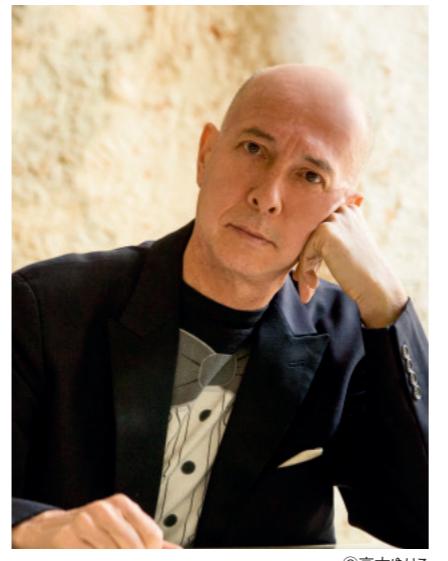
今回のコロナウイルスに対する世界の反応は、70年以上生きている僕にとって「想定外」です。いま現在アメリカでは11万人を超える人が亡くなっている。実はアメリカでは、2017年にインフルエンザで6万1千人が亡くなっていたのに、今まで何も騒がれなかったにもかかわらず、一体このコロナの世界的大騒ぎはどうしてなのだろうか…？あくまでも私見だが、これはスマホの普及など、インターネットの影響だと感じています。ゴッホが生前、雀の涙ほどしか絵が売れなかったのに、今や世界を席巻していると似ていると感じている。内実は変わらないのに「価値」は、別の力で変化してしまうのです。流行=ファッションも同じ。

オーバード・ホールは〈不要不急〉の芸術を常に上演する玉手箱です。でもその箱を開けることに、価値があるかどうかを決めるのは、新聞批評でも、ネットのイイね！の数でも

なく、あなた自身の主体性の価値観と感受性です。そんな判断が出来るようになることは、相当の知識と、努力と経験が必要でしょう。何事も人のせいにしない自己責任の意思を持つ事が大人ということではないでしょうか。

今、残念ながら世界は便利な情報機器の持つマイナス面に突き動かされています。欧洲の歴史ある個人主義に対しての子供の頃からの尊敬心も、音を立てて崩れてしまったと感じている。気高きイギリス人やフランス人がマスクをするなんて。み～～んなマスクな今、僕はひとり崖の上にある小屋から海へ降りていけるよう「天国への道」を削り終え、30年前になくなった父へのオマージュ、ミュージカルオペラ「降福からの道」を完成させました。コロんでも只では起きない！ズッコケでほんとに怪我したけれど。

指揮者 井上道義



2020年3月28・29日、オーバード・ホールの「樂市樂座」では、私が手がけた2つのパフォーマンスが上演される予定でした。富山ではまだ感染者が出ていない状況で、最後まで一縷の望みにかけていましたが、その願いは叶いませんでした。

私はコスチューム・アーティストとして、人の身体の魅力を伝えるために衣装を作っていますが、最初は舞台より映像の方に興味がありました。映像なら、非現実的なことを樂々と実現でき、可能性も大きいと思ったからです。

その考えを変えたのは、劇作家・演出家の野田秀樹さんとの出会いでした。1990年から野田さんと一緒に演劇、歌舞伎、オペラ、ダンスなど様々な舞台に関わってきましたが、特に思い出深いのは、歌舞伎「野田版 研辰の討たれ」(2005年)での体験です。その時の

富山の皆さん、お元気でお過ごしでしょうか？演劇関係そして数々のエンターテインメントが自粛や中止になり、非常に厳しい状況が続いております。残念なことに、毎年開催しているオーバード・ホール主催のミュージカルワークショップの成果発表会もその影響を受け中止になってしましました。一生懸命練習をして、努力を積み重ねてきた生徒さん達にとっては、とても辛い出来事だったと思います。

私がオーバード・ホール名作ミュージカル上演シリーズの「ハロー・ドーリー！」に参加してから、早いもので8年が経ち、その後も同シリーズの数々の作品に関わらせて頂きました。このミュージカルワークショップも毎年恒例になり、参加者も増え続けてきただけに今回の中止は私にとって本当に無念でした。

緊急事態宣言により、ステイホームをすることで素朴な発見がありました。時間に追われていた忙しい日々の生活が一変したことによっ

て、身の周りの片付け整理整頓から始まり、読書や音楽鑑賞、ミュージカル作品や映画など沢山の芸術に触れることで、自分にとっての好きなこと、そしてその優先順位を改めて確認することが出来たのです。「やっぱりミュージカルが好き！エンターテインメントが好き！」と。

富山にはオーバード・ホールをはじめ呉羽の芸術創造センターなど、東京では考えられない素晴らしい環境が整っています。富山の方は、地道に努力を重ねながら諦めずに目標に向かっていく底力があります。誰もが経験したことのないこの状況を前向きに捉えて、今まで以上に富山からエンターテインメントを発信していきましょう！

演出家・振付家・俳優 本間憲一



お客様の反応や掛け声があまりに素直で、観客と舞台の役者とが一体となり、最後は劇場中がすり泣き、鳴り止まない拍手が続きました。その高揚感は映像とは全く違う感覚でした。

舞台では、演者は汗をかき、衣装が着崩れ、予期せぬことが多々起こるので、その為に何度も練習し、常にベストを尽くせるように準備が必要ですが、それだけにリアルで魅力的な体験を生み出します。「樂市樂座」は、まさに江戸時代の舞台小屋のように、子供から大人まで全ての世代の人々が気軽に集い、LIVEで観ることの素晴らしさを味わえる機会でした。

現在、劇場は密を避けるため座席数を半分にするなどの対応を迫られ、厳しい状況です。でも今、劇場に関わる私たちがすべきことは、誰もが何度でもリアルで見たいと思うような作品を作り、上演を目指すこと。そのため、さらなる想像力を発揮しながら、前進すべきなのではないかと思います。

コスチューム・アーティスト ひびのこづえ

Hibino Kodue

Honma Kenichi



©Sadato Ishizuka

演出・振付・美術・衣裳
森山開次
インタビュー

新国立劇場 こどものためのバレエ劇場 2020

「竜宮 りゅうぐう」～亀の姫と季の庭～

昨年オーバード・ホールで行われたオペラ『ドン・ジョヴァンニ』の演出で富山の観客を熱狂させた森山開次が、新作バレエで帰ってくる。しかもなんと浦島太郎がモチーフだという。ちょっと意外な組み合わせだが、森山が創り出す独特の世界では、両者が見事に溶け合っているようだ。新型コロナウイルス感染拡大防止のため一時自粛していたクリエイションが再開したばかりの森山に、その意気込みを聞いた。

——浦島太郎がバレエになる、というのは驚きました。

今回新国立劇場からバレエ作品の振付演出のお話をいたいたとき、「日本の風土が活きていて、かつ大人から子供まで楽しめるものを」と考えました。浦島太郎は真っ先に浮かんだものの、僕も正直これは無理かなと(笑)。全体にドラマとしての物語が薄いし、なぜ玉手箱をあげたのか?と謎も多い(笑)。しかし御伽草紙(室町時代を中心とした民間話を集めた書物)を読むと、現代の僕たちに馴染みのある話とはだいぶ違うことに気づいたんです。

——浦島太郎の元の話は、どんな違いがあるのでしょうか?

浦島伝説は日本各地に様々なバージョンがありますが、御伽草紙では冒頭の亀を子供たちがいじめるエピソードではなく、釣り上げた亀

がじつは姫の変身した姿なんです。竜宮は海中ではなく島にあり、なにより太郎はおじいさんになったあと、さらに鶴に変身して、亀の姫と結ばれる「鶴亀のハッピーエンド」なんですね。これならばバレエになる!と思いました。

——なるほど。今回は衣裳や美術のデザインも森山さんが担当しており、トータルな世界観が感じられます。チュチュが亀の甲羅になっている姫の衣裳もキュートですね。

姫は亀なのでゆっくり歩きますが、ちゃんとトウシューズを履いていますし、可愛いですよ(笑)。ドラマ的には現代に馴染みのある部分も活かして「いいとこ取り」でいこうと思っています。冒頭のいじめっ子達も登場させ、竜宮はやはり海中にて「鯛やヒラメの舞い踊り」のようなバレエ的な見せ場もたっぷりあります。僕はもともとミュージカル

時間を超えていく「時の旅人」。
ダンサーは、
音楽は、「時間の芸術」。

出身でドラマも大切にしてきたので、今回もグッと引き込まれる作品にしたいですね。

——サブタイトルに「季の庭」とありますね。

これは竜宮の中にある「美しい日本の四季を一度に体験できる不思議な空間」です。この作品では「時間」が重要なモチーフになっています。そもそも海は地球の生命が誕生した「全ての時間の始まりの場所」ですしね。玉手箱も「太郎が過ごすはずだった時間が閉じ込められたもの」と考えられます。そこに「季の庭」という、時間を自由に行き来できる空間があり、そのために四季の踊りも作る予定です。もちろん現代人にとっても時間は重要なものですよね。とくに今回の自粛生活では、時間に追われていた普段の生活から、いきなり時間が止まったような「時の感覚の不思議さ」を味わいました。

——なるほど。浦島太郎とコロナ禍が、「時間」を通してリンクしてくるようですね。

僕は、音楽は「時間の芸術」だと思うんですよ。時間を区切った中に振られた音符を奏でたものが曲になる。そして曲に合わせて踊るダンサーは、時を超えていく「時の旅人」ではないか。それがダンスの醍醐味だと思います。今回は、様々な時間と旅を観客と一緒に楽しめる作品にしたいですね。

——バレエ団とのクリエイションはどのように進めていくのでしょうか。

僕もバレエのレッスンを受けたり、過去にバレエダンサーとの協働はたくさんありますが、「バレエ作品の振付」は、今回が初挑戦です。とはいっても、いまやバレエ団でも多くのコンテンポラリー作品を上演しますし、特に垣根は感じないですね。もちろん動きのボキャブラリーはバレエ団の方のほうが詳しいので、こちらが作りたいアイデアやイメージに対して「こんなことができます」と投げ返してもらうキャッチボールで進んでいます。

今回は、コンテンポラリー作品のように創っては壊しの繰り返しをする時間の余裕はないので、つねに自分の世界観を明確に伝えていく

必要があります。しかも70人ちかい団員を約35人2チームのフル动员ですからね。中には「自分がバレエ団を背負うんだ」という意識をもったダンサーがいて、心強いですよ。これはバレエ団という形のいいところですよね。彼らにはもっともっと背負ってもらえるようにいいシーンを作っていくつもりです(笑)。

——今回のように「生粋のバレエ出身でない人に新作バレエ作品の振付を依頼する」のは、海外では普通ですが、新国立劇場バレエ団では極めて珍しいと思います。期待のほどがうかがえますね。バレエ作品の中に、森山さんらしさの演出はどのように活きてくるのでしょうか。

美術を含め様々な新しいアイデアを盛り込みますが、基本的にはバレエを崩そうとするのではなく、バレエの良さが生きている作品にするつもりです。観劇後、「ああ、楽しいバレエ作品を見たな」と満足してもらいたいですね。

——バレエどっぷりの人が「新しさ」を目指すと、目先の工夫に終始してつまらない作品になります。むしろ森山さんのような「外部」の方が思い切りやって、あとはバレエという器の強さに委ねた方が、いい作品になることが多いですね。

本当にそう思います。それに僕も正直「バレエはこうでなきゃいけないんだろう」という思い込みがありました。じつはバレエって本当に自由なんですよ。新しい試みもたくさんあるし、そうとうに懐が深い。なにをやっても受け止めてくれる。ちょっとやそっとでは壊れない古典の強さを信じて、イメージをどこまでも羽ばたかせて行きたいですね。

——最後に、富山のみなさんに一言お願いします。

オーバード・ホールは施設も素晴らしい、どんな作品も安心してできる頼もしい劇場です。『ドン・ジョヴァンニ』のときは地元の皆さんにも参加していただき、楽しい時間をすごせました。今回の『竜宮』での再会をとても楽しみにしています。自粛生活は大変ですが、やはり舞台はいい、もっと劇場に行きたいという気持ちを皆さんと共有したいと思います。

取材・文 乗越たかお(作家・ヤサゲ舞踊評論家)

公演情報

新国立劇場 こどものためのバレエ劇場 2020

「竜宮 りゅうぐう」～亀の姫と季の庭～

◆演出・振付・美術・衣裳: 森山開次

◆出演: プリンセス 亀の姫: 池田理沙子 / 浦島太郎: 奥村康祐

◆日時: 2020年9月22日(火・祝) 14:00開演

◆会場: オーバード・ホール

◆チケット: [全席指定・税込]

ジュニア(4歳~高校生) 2,000円 一般 3,000円

※4歳未満のお子様のご同伴・ご入場はご遠慮ください。

※やむを得ぬ理由により出演者等変更の可能性がございますのでご了承ください。

◆プレイガイド: アスネットカウンター ほか

★チケットのお求めはP8「チケット購入方法」をご覧ください。



○抽選で「竜宮」出演者のサインをプレゼント! 詳細はP8をご覧ください。

※新型コロナウイルス感染対策を徹底して上演します。感染状況によっては公演の開催に変更が生じる場合がございます。ご来場前にはオーバード・ホール公式HPで最新情報をご確認いただけますようお願いします。



©Isamu Uehara

劇場は敷居が高いという声を時々耳にする。職業上、「そんなことはないですよ」と言うべきなのだろうが、実はとてもよくわかる。椅子に座ったら1時間半か2時間、あるいはもっと、飲食もお喋りも立つのも禁止、スマホを覗くことすら禁じられてしまう。せりふが聞き取れなくとも巻き戻せないし、音量もコントロールできない——。こんなサービスの悪い場所は今どきない。

けれどもそうした強制力こそが、私が劇場を好きな理由もある。なぜならそれらは、集中力が稼働するのに実に有効なシステムだから。体の自由が奪われることでスイッチが入り、うまく回路が開けば細胞が目まぐるしく動き、目の前にならないものさえ脳内で感じられる。そんな体験は他ではなかなか得られない。

*

『Meditation』は、俳優がせりふを喋って物語が進行する、いわゆる普通の演劇とは違う。観客は入口でヘルメットを渡され、ひとりずつ案内されて薄暗い場内に入る。座るのは、約2200ある客席のうち、細いスポットライトに照らされたわずかな席。舞台上にもいくつか細く光が当たっていて、観客を案内していた劇場職員が、やはりヘルメットを装着してそこにいる。その様子や他の客席をなんとなく眺め、流れで

劇場の中で、
もうひとつの劇場と
出合う。



タニノクロウ×オール富山 2nd Stage 関連企画

Meditation —The day before daylight—

「これで終わりです」というタニノの声が聞こえ、ヘルメットを取ると、舞台上に上がっていいことがわかって、観客がパラパラと地球の近くに集まる。半覚醒から現実へと軟着陸した人々は、地球と劇場の記録を残すためスマホで写真を撮っていた。

*

4月以降、世界のほとんどの演劇公演が中止か延期になり、観客数の制約を受け、どうすれば公演ができるか関係者は知恵を絞っている。配信や無観客などさまざまなアイデアが出たが、ほとんどが劇場の臨場感や一体感を目標、基準に置いていた。そんな中で『Meditation』は、実際の劇場にいながら自分だけの劇場を獲得し、それによって劇場がどんな作用を及ぼすかをビビッドに確認できる無二の作品だった。

*

くる音——ノイズと轟音の中間のような音楽未満の音——をぼんやり聴いていると、作品はスタートしている。

とはいっても、ヘルメットが頭部をすっぽり包むタイプで、重く、前面がシールドで覆われているため、自由に視線を動かせない。音もクリアではない。その不自由さの中で、変わり続ける音楽に身を任せていると、やがて変化が小さくなり、完全な無音と闇が訪れた。光と音の洪水から、宙ぶらりんな真空の時間へ。あと数時間このままでも良いと思えるよう

な心地よさが広がり、ヘルメットの窮屈さが身体との一体感に変わる。そのうち「美しく青きドナウ」が聞こえてきて、舞台中央に照明が当たり、布のようなものが揺れ出す。内側で人が踊っているのかと思ったそれは次第に大きな球体になり、舞台奥から強烈な青い光線が差し込んで地球とわかった。地球は柔らかく、いびつで、美しかった。その時、ああ、このヘルメットは劇場だ、と思った。外側と遮断された孤独、身体的な制約の中で、何かが研ぎ澄まされ、何かが解放される。目の前にあるものを通り越して、目の前にならないものが脳内で醸成されていく。これまで何度も劇場で体験したその感覚を、ヘルメットは凝縮して感じさせる装置だった。

AUBADE HALL Presents ベートーヴェン入門講座「樂聖と呼ばれた男」

ベートーヴェンの実像にせまる

3つのミニ講座 Beethoven

ベートーヴェンとワインの 深～い関係

ベートーヴェンがこよなく愛したワイン。なかでも、美しい黄金色をしたハンガリー特産の甘いワインには目がなかったそうですが、ワインは樂聖の孤独と健康を読み解く、重要なアイテムでもあります。ベートーヴェンの家系には酒好きが多く、父親の酒癖の悪さは有名ですが、祖母もアルコール中毒だったといわれます。

ベートーヴェン家の祖先は、15世紀のフランドル地方(現在のベルギー、マリーヌ)まで遡ることができます。ベートーヴェンの母マリア・マグダレーナ・ケーヴェリヒの実家は、じつはワインの醸造所でした。ドイツ、モーゼルのゲシュヴィスター・ケーヴェリヒ醸造所では、マリアの末裔がいまでもワインを造っています。このワインは、日本にも輸入されて「ベートーヴェン・ワイン」という名で販売されているとか。興味のある方は、ベートーヴェンのルーツともいえるこのワインをご賞味されてはいかが?

ベートーヴェン創作の秘密は 「ヤドカリ人生」にあり?

西洋音楽史上最強(?)の「引越し魔」として知られるベートーヴェン。その回数は、57年の生涯でじつに79回にも及びますが、じつは、日本にも猛烈な引越し魔がいます。その名は、北斎。89年の生涯を全うした天才絵師の引越し回数は、何と93回! 近所トラブルに加えて夏の避暑期ごとに転居を繰り返したベートーヴェンと、絵を描くことに熱中するあまり部屋の掃除をせず、汚れるたびに引っ越ししたという北斎。それぞれに事情は異なるものの、ふたりからみえてくるのは、執念ともいえるすさまじい創作エネルギーと転居との関係です。

ベートーヴェンも北斎も、晩年までひたすら自分の殻を破り続けた芸術家でした。まるで「ヤドカリ」が殻を変えて成長するように、転居が彼らの新たな創作意欲を刺激したとすれば、転地療法ならぬ「転居療法」という効果が、もしかすると時代を超えた芸術家たちのたゆまぬ創造力のエネルギーになっていたのかもしれません。

生誕250周年を記念して、10月から4回に渡って開催する「ベートーヴェン入門講座」。波乱の生涯を数々の名曲とともに辿りながら、樂聖と呼ばれた男が生きた時代背景と、その実像を浮き彫りにします。講座には、とっておきのエピソードもいっぱい! その楽しさを少しだけ講師の浦久俊彦さんにご紹介いただきましょう。

ベートーヴェンと 湯けむりミステリー・ツアー

世界有数の温泉国ニッポン。日本の情緒とあまりにも深く結びついているために、温泉は、つい日本の風物詩と思われがちですが、日本でもおなじみの「スパ」の語源が、ベルギーの温泉街スパからきているように、じつはヨーロッパも多彩な温泉をもつ温泉王国です。ベートーヴェンも温泉をこよなく愛したひとり。その彼が主役となる西洋音楽史上最高のミステリーといわれたのが、ベートーヴェンと『不滅の恋人』にまつわる謎です。

ベートーヴェンの死後、秘密の引き出しから発見された宛名のない恋文。「わたしの天使、わたしのすべて、わたし自身よ」という熱烈なラブレターは、いったい誰に向けて書かれたのか? ベートーヴェンの謎の恋人とは誰だったか? このミステリーの舞台となったのが、じつは山深きボヘミアの温泉地でした。まるで火曜サスペンス(?) ながら旅情ロマンをそそる湯けむりの温泉街を巡るミステリー。この謎解きは、どうぞ本編をお楽しみに!

公演情報

AUBADE HALL Presents
ベートーヴェン入門講座
「樂聖と呼ばれた男」

インターネット
配信あり!
LIVE



- ◆講師: 浦久俊彦(文筆家・文化芸術プロデューサー)ほか ゲスト演奏家
- ◆講座日程【全4講座】※全日程15:00開演
1限目(前期)10月11日(日)……「ベートーヴェンとナポレオン」
2限目(中期)11月1日(日)……「ベートーヴェンと甘~いワインの謎」
3限目(後期)11月3日(火・祝)……「ベートーヴェンと温泉」
4限目(総集編)12月13日(日)……「ベートーヴェンと宇宙」

①会場で直接受講する(各回限定 先着約100席)

- ◆会場: 富山市民プラザ アンサンブルホール
- ◆ホール受講料: 【全席指定・税込】
一般 / 1講座: 1,500円 ジュニア / 1講座: 500円
※ジュニアは小学生から高校生までが対象です。未就学児入場不可。
- ◆チケット発売日: アスネット会員先行: 8月1日(土)のみ
一般発売: 8月9日(日)~

②インターネット配信でオンライン受講する

- ◆オンライン受講料: 一般・ジュニア / 1講座: 500円
アスネット会員 / 全講座: 無料
※10/4まで申込
- ◆配信チケット発売期間: 8月9日(日)~各講座前日まで

チケット購入方法などは、
こちらから

